

史跡富田城跡環境整備事業（ふるさと歴史の広場事業）に伴う

# 史跡富田城跡

THE TODA CASTLE RUINS

## 発掘調査報告書

(山中御殿平・花ノ壇地区)



平成14年3月

広瀬町教育委員会

# 序

広瀬町はかつて戦国時代の雄、尼子氏の本拠地として知られ、その後毛利氏、堀尾氏の治世を経て、江戸時代には松江松平家の支藩である広瀬藩の城下として栄えた地域です。中でも中世における支配の拠点である富田城跡は中国地方を代表する城館遺跡として広く知られており、昭和9年には国の史跡に指定されました。

しかし廃城後約400年を経て石垣の崩落や遺構の損壊がみられるようになり、早急な遺跡の保存整備が必要になりました。

また近年生活環境や文化環境の変化に伴って、史跡への関心が高まったことから、町民が史跡により親しめるよう整備活用していくことが求められるようになりました。

このような状況を受けて広瀬町では平成5年から「ふるさと歴史の広場」整備事業を実施し、以後現在に至るまで継続して富田城跡の調査・整備に取り組んで参りました。

この度、平成9年度に発掘調査を行った山中御殿平と花ノ塙について、報告書を刊行する運びとなりました。城の規模に比べると調査した面積はわずかではありますが、当時の大手口とも考えられる遺構が発見されるなど、富田城の実像に迫るために多くの成果を得ることができました。

今後も富田城跡を郷土が誇れる文化財として、またより身近な歴史教育の場として活用出来るよう努めて参りたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査にあたり御指導頂きました文化庁・島根県教育委員会をはじめとする関係各機関そして史跡富田城跡総合整備委員会の先生方、そして発掘調査に従事されました方々や、ご指導、ご協力いただいた皆様にお礼を申し上げると共に、本書が地域の歴史解明に役立つことを念願致しております。

平成14年3月

広瀬町教育委員会

教育長 村上晴夫



## 例　　言

1. 本書は、平成2年度に策定された史跡富田城跡総合整備計画を受け、広瀬町教育委員会が平成5年度から実施している史跡等活用特別整備事業「ふるさと歴史の広場」に伴う史跡富田城跡発掘調査及び整備事業報告書である。
2. 本事業は、文化庁、島根県教育委員会、史跡富田城跡総合整備委員会の指導を得て、広瀬町教育委員会が実施した。
3. 史跡富田城跡総合整備委員会および事務局は、次の通りである。  
(平成9年度・山中御殿平・花ノ壇地区)

### (1) 史跡富田城跡総合整備委員会

山本　清　　島根大学名誉教授  
藤岡大拙　　島根県立女子短期大学教授  
井上寛司　　島根大学教授  
村田修三　　奈良女子大学助教授  
河瀬正利　　広島大学講師

### (2) 協　力

五味盛重　　文化財建造物技術協会  
北垣聰一郎　兵庫県立兵庫工業高校教諭

### (3) 指導・助言

文化庁  
島根県教育庁文化財課

事業主体　　広瀬町教育委員会

事務局　　喜多川　忠（教育長）

　　平井六四郎（教育次長）

　　竹中　哲（文化係長）

　　祖田　界（文化係主任）

調査担当　　竹中　哲（文化係長）、内田雅巳（主任主事）、阿部賢治（臨時職員）

　　金子義明（嘱託職員）

発掘作業員　　岩田博道、近藤幸吉、仙田茂道、祖田　亮、山岡幸雄

(平成13年度・報告書作成)

事業主体　　広瀬町教育委員会

事務局　　村上晴夫（教育長）

　　加納　弘（教育次長）

　　足達　修（主査兼文化財係長）

　　石原秀樹（文化財係主任）

整理担当 舟木 暉（文化財係主事）

整理参加者 金子義明（嘱託職員）、吉田 博（臨時職員）、西村千枝子（臨時職員）

4. 発掘調査、並びに報告書作成にあたっては、以下の方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して謝意を表しておきたい。  
小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）、東森 晋（島根県埋蔵文化財調査センター）、  
榎原博英（浜田市教育委員会）、梅木 茂雄（江津市教育委員会）
5. 本報告書に掲載した第1図は建設省国土地理院のものを、他の富山城跡に関する地形測量図は株式会社ワールドに委託・作成したものを利用した。
6. 遺構に用いた略記号の内容は以下の通りである。  
S B（建物跡）・S K（土壙）
7. 本報告書に使用した実測図は各調査員の他、金子、吉田、西村が作成し、遺物写真の撮影は金子が行った。
8. 本報告書の執筆は、主として舟木が行い、第2章第2節については金子が担当した。
9. 本報告書の編集は、舟木が行った。
10. 出土遺物及び実測図、写真は広瀬町教育委員会で保管している。

# 本文目次

序文

例言

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	(1)
第Ⅱ章 歴史的環境	(2)
第1節 宮田城跡周辺の城館遺跡	(2)
第2節 宮田城の歴史的背景	(5)
第Ⅲ章 発掘調査成果	(7)
第1節 山中御殿平地区	(7)
1. 検出遺構	(8)
2. 出土遺物	(18)
第2節 花ノ壇地区	(22)
1. 検出遺構	(22)
2. 出土遺物	(24)
第Ⅳ章 まとめ	(25)

# 挿図目次

第1図 調査地位置図	(1)
第2図 周辺の城館遺跡	(3)
第3図 山中御殿平・花ノ壇地区調査区配置図	(7)

- 第4図 山中御殿平・花ノ壇地区遺構配置図 ..... (9)
- 第5図 山中御殿平地区 S B 0 1 ..... (11)
- 第6図 山中御殿平地区 S K 0 1 ..... (12)
- 第7図 虎口遺構実測図 ..... (13)
- 第8図 帯曲輪遺構実測図 ..... (16)
- 第9図 帯曲輪遺構土層図 ..... (17)
- 第10図 S K 0 1 出土遺物実測図 ..... (18)
- 第11図 虎口遺構出土遺物実測図 ..... (19)
- 第12図 帯曲輪遺構出土遺物実測図 ..... (19)
- 第13図 山中御殿平地区出土遺物実測図 ..... (21)
- 第14図 花ノ壇地区石垣前面土層図 ..... (22)
- 第15図 花ノ壇地区遺構実測図 ..... (23)
- 第16図 花ノ壇地区出土遺物実測図 ..... (24)
- 第17図 山中御殿平地区の虎口跡 ..... (26)

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯

史跡富田城跡は、昭和9年に国の史跡指定を受けてから、千豊平・太鼓壇付近及び山頂部の本丸については公園整備が行われていたが、城跡自体の調査研究は昭和52年から山中御殿平地区の発掘調査が実施されるまで行われなかった。

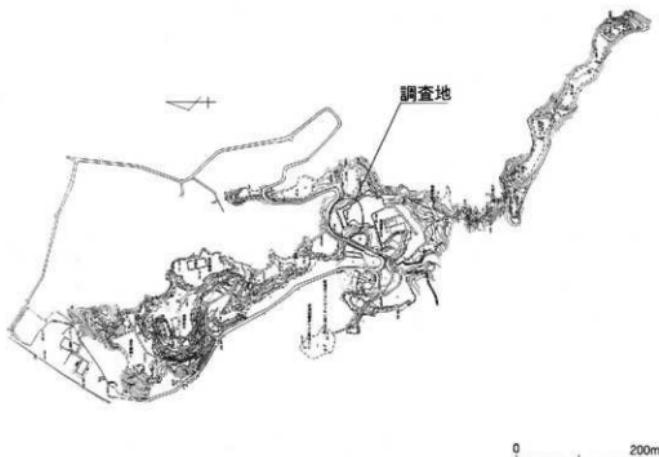
その後平成5年度より史跡等活用特別整備事業「ふるさと歴史の広場」の指定を受けて、史跡富田城跡の調査・整備を進めていく事となり、当初の方針は城跡内の通路遺構を発掘調査によって検出し、往時のルートに乗っ取った園路を整備することに重点を置いた。

このうち平成5年～平成8年度にかけて実施した事業については、千豊平、花ノ壇、山中御殿平、二ノ丸地区について発掘調査・整備を行い、通路遺構の他、建物跡や櫓列、土壙や溝状遺構、石垣等を検出した。中でも二ノ丸地区においては、大小3棟の掘立柱建物跡を初めとして礎石建物跡や多数の柱穴群が検出された他、16世紀中葉のものを主体とする質・量ともに豊富な遺物が出土しており、城主の居住空間であったと推定されている。

なお、これらの調査結果については平成9年度刊行の「史跡富田城跡環境整備事業報告書」において報告されている。

今回の報告書では平成9年度に実施した山中御殿平地区及び花ノ壇地区の発掘調査成果をまとめることとする。

平成9年度調査では、先に調査・整備を行った花ノ壇地区からの通路跡が山中御殿平の通称「多開櫓」石垣の外側まで続いていることを踏まえ、この通路跡がどのような形で山中御殿平に連結していくのか明らかにすることを主要な目的とした。



第1図 調査地位置図 (S=1/8000)

## 第Ⅱ章 歴史的環境

### 第1節 富田城跡周辺の城館遺跡

広瀬町及び隣接する安来市近辺には中世期の遺跡、特に城館遺跡が数多く存在しており、県内でも有数の密集地帯である。

ほとんどの遺跡が山城跡で、比較的高い山上に所在しているため、遺構の残存状態は良好であるが、比較的集落に近い低丘陵上に所在する遺跡は田畠の開墾や宅地造成等により、消滅もしくは損壊しているものがある。

多くは広瀬の町の周辺に集中し、富田城跡と何らかの関わりを持つ城館跡と考えられる。

富田城跡に関する遺跡としては、北東の新宮谷に尼子国久率いる新宮党の居館跡のある新宮谷城館跡群（3）そして南西の塩谷には明星寺館跡を中心とした明星寺・塩谷城館跡群（2）が存在し、それら城館群と連携して富田城の防禦を固めている。

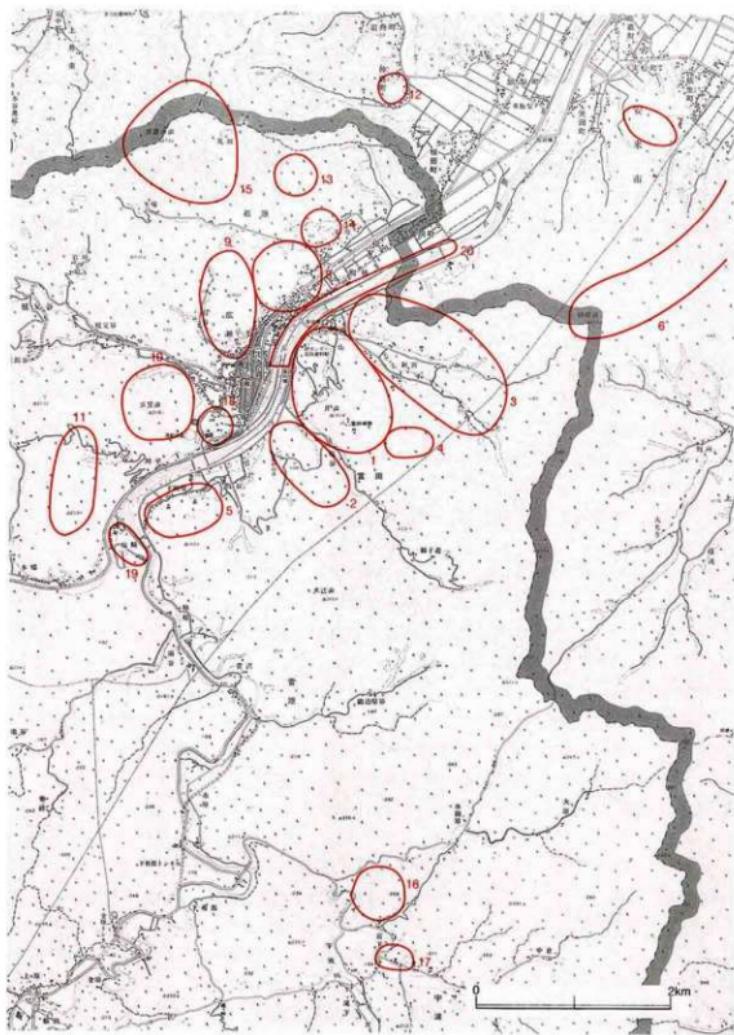
北部山麓を流れる飯梨川（富山川）の河床には城下町遺跡である富田川河床遺跡（20）がある。1666年の大洪水によって水没し、以後幻の城下町と呼ばれてきたが、昭和40年代に上流にダムが建設されて以来、徐々に遺構が露呈するようになり、昭和49年の発掘調査を皮切りに、数次に渡る調査の結果大量の遺構・遺物が発見され、中～近世を代表する遺跡として知られるようになった。

その他著名なものとしては京羅木山城砦跡群（15）勝山城跡（13）等がある。京羅木山城砦跡群は天文12年（1543）大内義隆の富田城攻めの際本陣が置かれたと伝わる城で、山頂部から尾根伝いに曲輪が連続している。特に東方尾根筋には折形虎口と連続堅堀で防衛を固めている。

勝山城跡は京羅木山城砦跡群の南東端に位置し（富田城攻めの際毛利軍の本陣的城砦であると考えられる）、特徴的なのは地元で「槍溝」と呼ばれる連続堅堀群と、「人耕」と呼ばれる中世では県下最大規模の折形虎口の存在である。

これらの遺跡の内、富田城跡と富田川河床遺跡以外で発掘調査が行われたものは少ない。日向丸城跡（4）は富田城跡南東の谷を挟んだ丘陵上に所在する。山頂から尾根伝いに伝・尼子晴久墓のある段まで曲輪が連続しており、富田城本体と連携して背後を防衛するための城砦と考えられる。平成11年に林道建設に伴って一部の曲輪について発掘調査が行われ、堀切状遺構1箇所を検出した他、尾根筋を削平して平坦面を造り出し、それによって出た土砂を平坦面先端に盛ることで面積を確保していることが確認された。遺物は出土していない。

福頼城跡（19）は、伝承では福頼氏の居城と言い伝えられている城跡で、舌状丘陵先端に階段状に曲輪を配置し背後を土塁と深い堀切で切断している。福頼は田地造成に伴い昭和62年に発掘調査が行われ、建物跡と考えられるピット群とともに、備前焼窯（開窯編年Ⅳ期）や青磁碗、白磁小壺、土器擂鉢、土鍋などが出土している。陶器類はいずれも15世紀初頭頃に限定されることから、比較的古い時期の城館跡として注目される。



第2図 周辺の城館遺跡

表1 周辺の中世城館遺跡一覧

名 称	種 别	所 在 地	概 要	備 考
1 富田城跡	城館跡	広瀬町富田	曲輪、帶曲輪、土塁、石垣、堀切、虎口、陶磁器、瓦	国史跡
2 明星寺・塩谷城館跡群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、土塁、堀切	
3 新宮谷城館跡群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、堀切、陶磁器他	県史跡新宮 党館跡含む。
4 口向丸城跡	城館跡	広瀬町富田	曲輪、堀切	H11年一部 発掘調査。
5 寺山城跡	城館跡	広瀬町菅原	曲輪、堅堀	蓮花寺山城
6 独松山城砦群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、土塁、堀切、堅堀	
7 飯牛山城跡	城館跡	安来市飯牛町	曲輪、堅堀	
8 亀井ヶ成、誓願寺裏城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬、石原	曲輪、土塁、井戸	
9 大成山城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、土塁	
10 三笠山城跡	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、堀切	
11 経塚山城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪	
12 神庭横山城跡	城館跡	安来市神庭町	曲輪	
13 勝山城跡	城館跡	広瀬町石原	曲輪、土塁、堀切、連続堅堀、桟形虎口	瀧山城
14 石原城跡	城館跡	広瀬町石原	曲輪	
15 京羅木山城砦跡群	城館跡	広瀬町石原	曲輪、連続堅堀、虎口、土塁、堀切	
16 高小屋城跡	城館跡	広瀬町宁波	曲輪、堀切	宁波城？
17 土居城跡	城館跡	広瀬町宁波	曲輪、陶磁器	削平等によ り一部損壊。 宁波城？
18 勝日山城跡	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、土塁、堀切、井戸	八幡山城、 削平等によ り造構一部 損壊。
19 福頼城跡	城館跡	広瀬町下山佐	曲輪、土塁、堀切、柱穴、陶磁器他	消滅 S62年発掘 調査
20 富田川河床遺跡	集落跡	広瀬町富田～ 安来市古川町	城下町造構、風呂造 構、陶磁器他	

## 第2節 富田城の歴史的背景

富田城の築城は平安時代末期の平景清によるとか鎌倉時代初期の守護佐々木義清によるなど諸説ある。しかし築城に関する確かな史料は無く築城年代は明らかではない。

鎌倉時代中期の佐々木泰清の時に出雲西部の塙治郷に守護所がおかれて、その子頼泰が塙治氏を称して守護職を継承し、弟の義泰が富田庄を得て富田氏と称した。<sup>(1)</sup>

暦応4年（1341）室町幕府内の対立で頼泰の孫塙治高貞が討伐され、康永2年（1343）京極高氏（佐々木道誉）が出雲守護職となり文和3年（1354）には富田庄を領有する。しかし南朝方の山名氏の介入もあり、京極氏が富田庄を掌握するのは明徳2年（1391）いわゆる「明徳の乱」で山名氏が没落した以降である。<sup>(2)</sup>

京極氏の守護代として尼子持久が近江より下向したとされているが、正確な時期は不明であり、持久自身に関する史料もほとんどない。<sup>(3)</sup>

出雲国における尼子氏の動向が確認できるのは尼子清貞からであり、「応仁の乱」に関連した伯耆山名氏との戦いや、出雲国内の土一揆・國一揆に対処したことに関する尼子刑部少輔（清貞）宛の史料がある。これらの戦功により清貞は能登郡奉行職、美保関代官職等、出雲東部への影響力や港湾の支配、船舶への課税の利権を獲得し、出雲国における権力基盤を形成していく。

高貞の死後、守護所がどこに置かれたかは不明であるが、応仁～文明年間（1467～1487）頃までには富田庄に守護所が置かれていたようである。

富田城の存在を示す史料としては文明8年（1476）5月14日、同年5月17日の京極政高感状に「当城」、「富田要害」とある。また年未詳ではあるが5月12日付の政高書状には「当城大木戸役事」とあり、大木戸（城門）の存在も確認できる。

清貞の子である尼子経久については、清貞関係史料の最終年紀が文明8年であること、経久の宛名が又四郎から民部少輔に変わった文明11年（1479）の史料から推測してこの頃に家督を継承したと考えられる。

経久は文明16年（1484）に寺社本所領の横領や御所修理料段銭の緩急を理由に室町幕府によって追放される。その後の経緯は明らかではないが、文亀～永正年間頃から史料に再びその名が見られることから、この頃には復職しているようである。

経久関連の史料は杵築（出雲）大社、鰐淵寺、日御碕神社、岩屋寺等の関係資料から考察して、領国の安定をはかるために寺社政策を重要視していたことがわかる。<sup>(4)</sup>

経久の孫である晴久（詮久）は天文年間初頭に経久の三男尼子（塙治）興久との内紛、天文9年（1540）安芸の毛利氏への出兵、天文12年（1543）の大内氏の來攻<sup>(5)</sup>等を経て天文21年（1552）には室町幕府より八カ国（守護職）に補任される。<sup>(6)</sup>

また天文23年（1554）には経久の次男尼子国久率いる新宮党を討滅して軍事力を弱体化させたとされている。この事件に関する確かな史料はないが、この頃の晴久は家臣團を從来の一族衆や国人衆主体から直臣である富田衆主体へと改革していることが各史料から推測できることから、新宮党の討滅がこのような支配体制確立のためのプロセスの一つであったと考えられる。なお、新宮谷の太夫成（伝・新宮党館跡）の発掘調査では16世紀中葉以前の遺物が出土しており注目される。<sup>(7)</sup>

晴久の死後、永禄5年（1562）大内氏の旧領を手中に収めて勢力を拡大しつつある安芸の毛利氏が出雲侵攻を開始したことより次第に尼子氏の出雲国人衆への支配能力は弱まり、ついに永禄9年（1566）11月富田城は開城され、晴久の子で時の当主である義久は安芸国に23年間幽閉された。<sup>(6)</sup>

その後尼子勝久・山中幸盛（鹿介）を中心とする旧領回復のための軍事行動が天正6年（1578）まで続いたが<sup>(5)</sup>失敗に終わり、出雲尼子氏はついに終焉を迎えたのである。

毛利氏の支配下に置かれた富田城は、毛利元秋、元康と受け継がれた。

その後天正19年（1591）に吉川広家が入城する。<sup>(10)</sup> 城内にある巖倉寺には天正20年（1592）2月二宮兵介長正（吉川家家臣）銘の鋳鉄製釣灯籠が所蔵されている。

慶長5年（1600）関ヶ原の戦いの後、代わって遠州浜松より転封してきた堀尾吉晴が慶長16年（1611）に松江に築城したことで富田城は政治的機能を失い、元和元年（1615）徳川幕府による一国一城令の公布により廃城されたと考えられる。<sup>(11) (12)</sup>

- 
- (1) 『続群書類從』 佐々木氏系図
- (2) 『戦国大名尼子氏の伝えた古文書 佐々木文書』 島根県古代文化センター  
文書番号 8・24・62・66・67
- (3) 『大社町史史料編』 文書番号706 日御碕神社文書「永享11年(1439)11月 一神子旨上書」に正長元年（1428）年10月17H并当年正月6日の事として尼子四郎左衛門尉の名がある。持久との関係は不明。
- (4) 『佐々木文書』 127～201・222・223  
『大日本古文書』 吉川家文書317  
『新修島根県史』 雲樹寺文書等
- (5) 『大日本古文書』 吉川家文書1481、天文11年10月6日付の史料に、晴久が山佐村（現広瀬町山佐）地下人の忠義を貰すると共に本年の税を免除し、今後2年間の税の半分を免除するよう森脇山城守（家貞）に命じたとあり、この合戦に関わることかもしれない。
- (6) 『萩藩閥閥録』 卷16志道69・卷109三戸1他。『大社町史史料編』 1154 錫浦寺文書。  
『佐々木文書』 225～231  
『大日本古文書』 毛利家文書283・286
- (7) 『史跡富田城関連遺跡群発掘調査報告書』 島根県教育委員会 昭和58年3月
- (8) 『萩藩閥閥録』 卷84尾玉19、卷102冷泉15・16他  
『広島大学文学部紀要49』 内藤文書（内藤家之次第覚書）
- (9) 『大日本古文書』 吉川家文書1466他
- (10) 『出雲意宇六社文書』 秋上家文書469
- (11) 『出雲私史』 文久2年
- (12) 山中御殿半地区昭和55・56年度調査時に方形石組造構内より肥前系陶器（1610年埴燒業と伝わる一ノ瀬高麗窯の鉄絵大皿）が出土していることからも推測される。

## 第Ⅲ章 発掘調査成果

### 第1節 山中御殿平地区

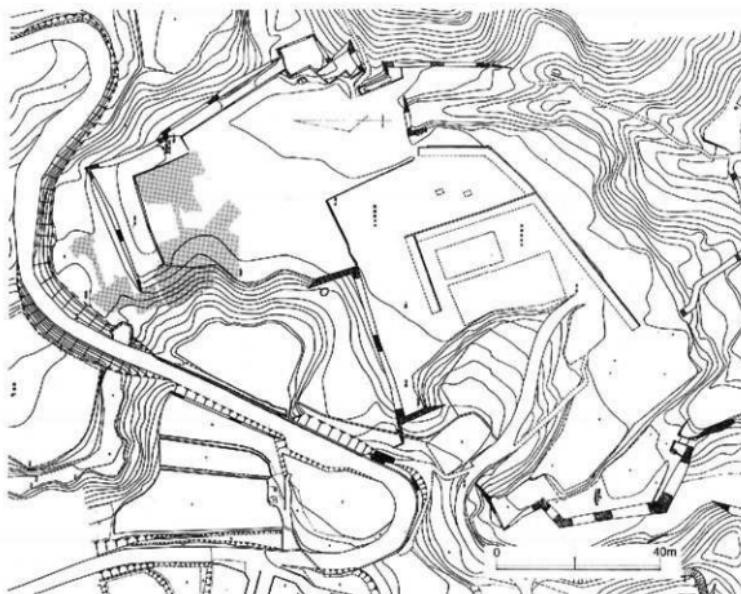
山中御殿平地区は、史跡富田城跡を代表する曲輪群で、大きく分けて上御殿平と下御殿平の2つの曲輪から構成されている。周囲には石垣が築かれており、すぐ背後に主郭部のある月山がそびえている。

以前から山中御殿平地区への進入ルートは、まず上御殿平北側の伝・「大手門跡」、西側の「塩谷口」、そして下御殿平東側の「苔谷口」の三箇所が言い伝えられている。

山中御殿平地区の最初の発掘調査は昭和52年に石垣修理に伴って苔谷口及び塩谷口付近について行われ、<sup>(1)</sup> 以後現在まで断続的に継続されている。

この間昭和55・56年には御殿跡中心部の発掘調査が実施され、中心施設の掘立柱建物跡の他、礎石建物跡、井戸跡等多数の遺構が見つかっている。<sup>(2)</sup>

今年度調査では山中御殿平の内部、下御殿平と呼ばれている郭の北及び北西部の俗に「多開櫓跡」と呼ばれている石垣遺構の内側及び西側斜面部に調査区を設定し、花ノ壇方面からの進入ルートを解明することに重点を置いた。



第3図 山中御殿平・花ノ壇地区調査区配置図 (S=1/1200)

## 1. 検出遺構

### (1) SB01(第5図)

山中御殿平地区の通称「下御殿平」の北端部で検出した梁行き2間、桁行き6間を測る掘立柱建物跡である。

通称「多聞櫓石垣」の内側部分に沿って、地山面である堅く締まった真砂土層上に作られており、主軸を北西—南東に取っている。北側の梁行き部分と石垣の間には幅約1.2m、高さ約30cmの段差がある。

主柱穴の柱間距離は梁行き桁行き共に概ね2m前後であることから、6尺5寸を想定して作られているものと思われる。

P8とP16の間及びP9からP12の主柱穴の間に間柱と思われる浅い柱穴を配置している。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、P8・12・13・14・20・23は上屋の高さを調整するため二段掘りにしている。P8-P16間の柱間は概ね2.5mを測るがP8-P21間は1.5m、P16-P17間は2.85mの柱間となっている。

建物跡の西半部は後世に桑畠を開墾する際に若干の削平を受けており、他の部分でも耕作土が遺構面直上まで達していた。

遺構に伴う遺物は出土しなかったため、本建物跡の年代については不明であるが、石垣の存在を強く意識して作られた遺構と思われる。

遺構の性格については、後述する虎口遺構付近を警備する番所的な役割を持った施設ではなかったかと思われる。

### (2) SK01(第6図)

掘立柱建物跡SB01の西側に隣接して存在する大型の土壙である。

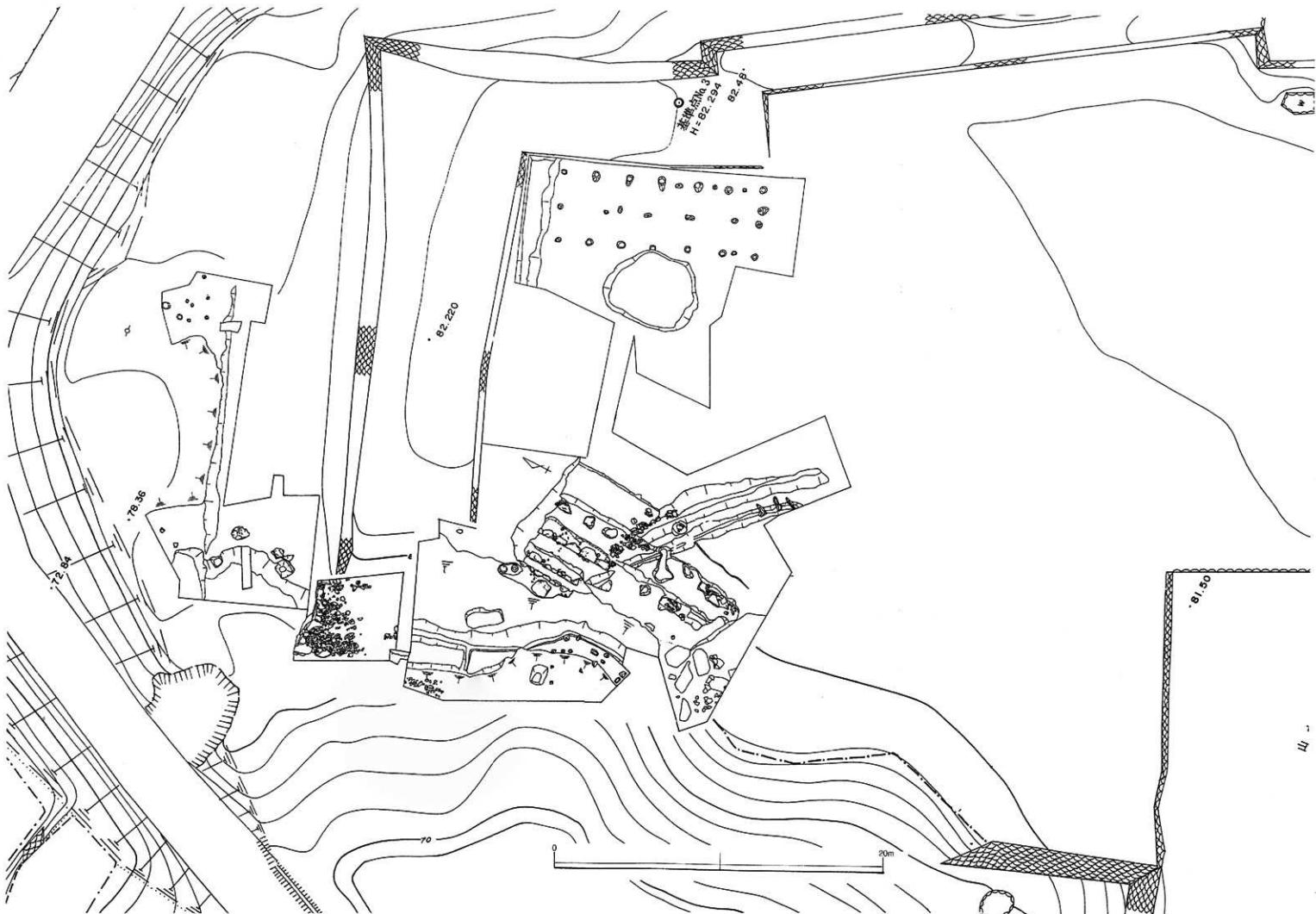
平面形は不整楕円形を呈し、南北径約5.7m、東西径約4.5mを測る。断面は浅い碗状を呈し、堀り方と底面の区別はあまりはっきりしない。深さは最深部で約50cmを測る。

土壙の東端がSB01の柱穴であるP4と切り合っているが、遺構同士の前後関係は確認出来ていない。

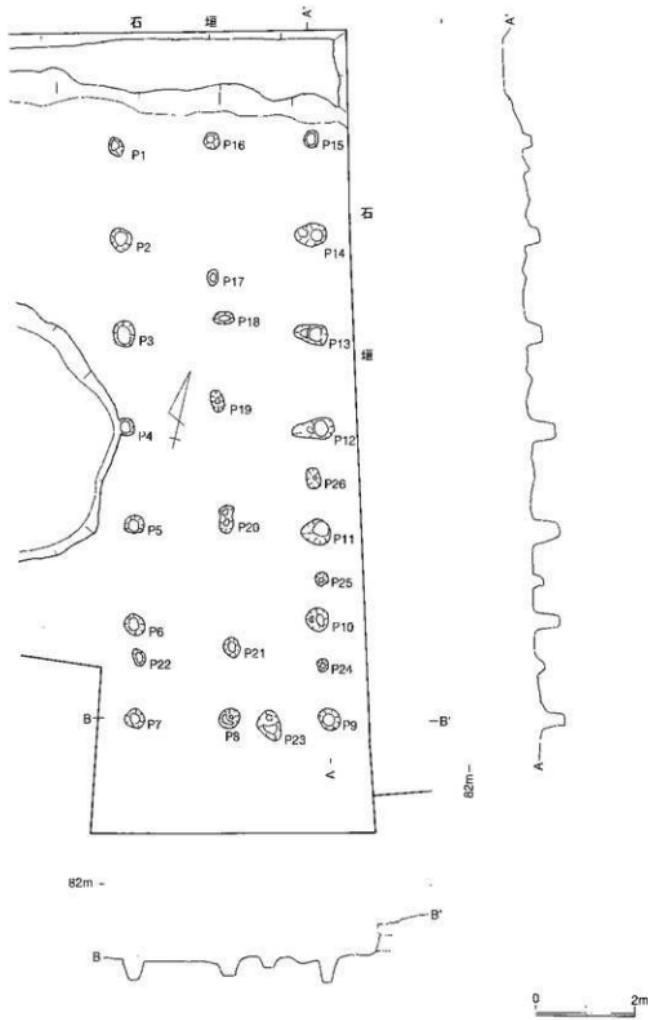
土壙内には暗茶褐色を主体とする砂質土が覆土上面から約40cmの深さまで堆積していたが、そこから土壙底部までは炭化物を多量に含んだ黒褐色粘質土が堆積しており、その層中から京都系土師器皿を主体とする多くの遺物が出土した。

遺物は破片総数326点を数え、内訳は京都系土師質土器皿が最も多く全体の89%を締めている。その他には鉄絵を施した唐津系陶器や瀬戸・美濃系陶器の破片の他、瓦片、中国製青花が含まれ、中には2次的焼成を受けた破片もある。出土した陶磁器類から見て、16世紀末～17世紀初頭頃の遺構と考えられる。

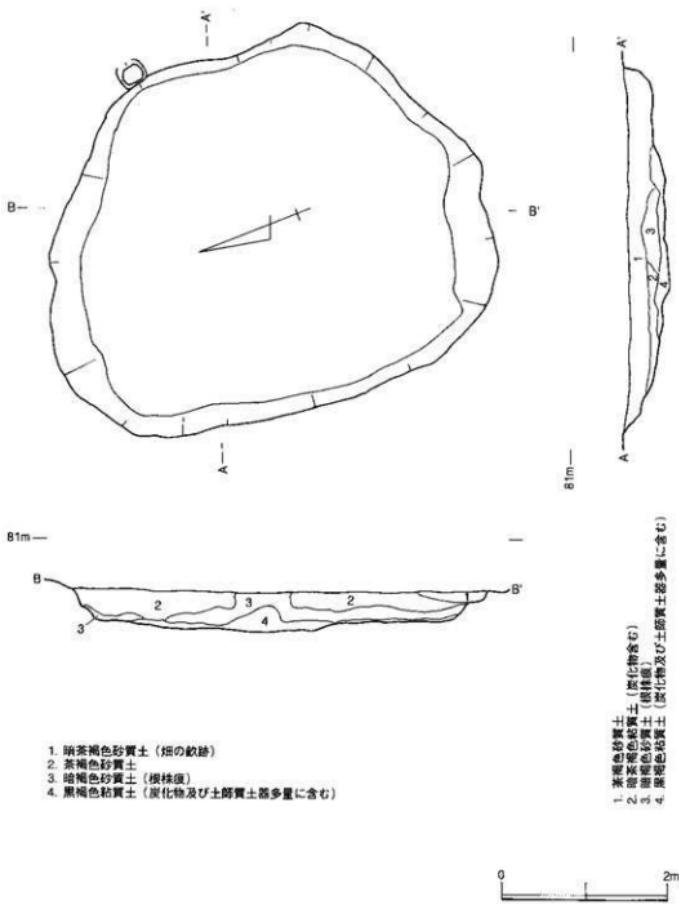
遺構の具体的な性格については不明であるが、出土遺物の出土状況や炭化物を多く含んでいることなどから、おそらく廃棄用の土壙ではないかと思われる。



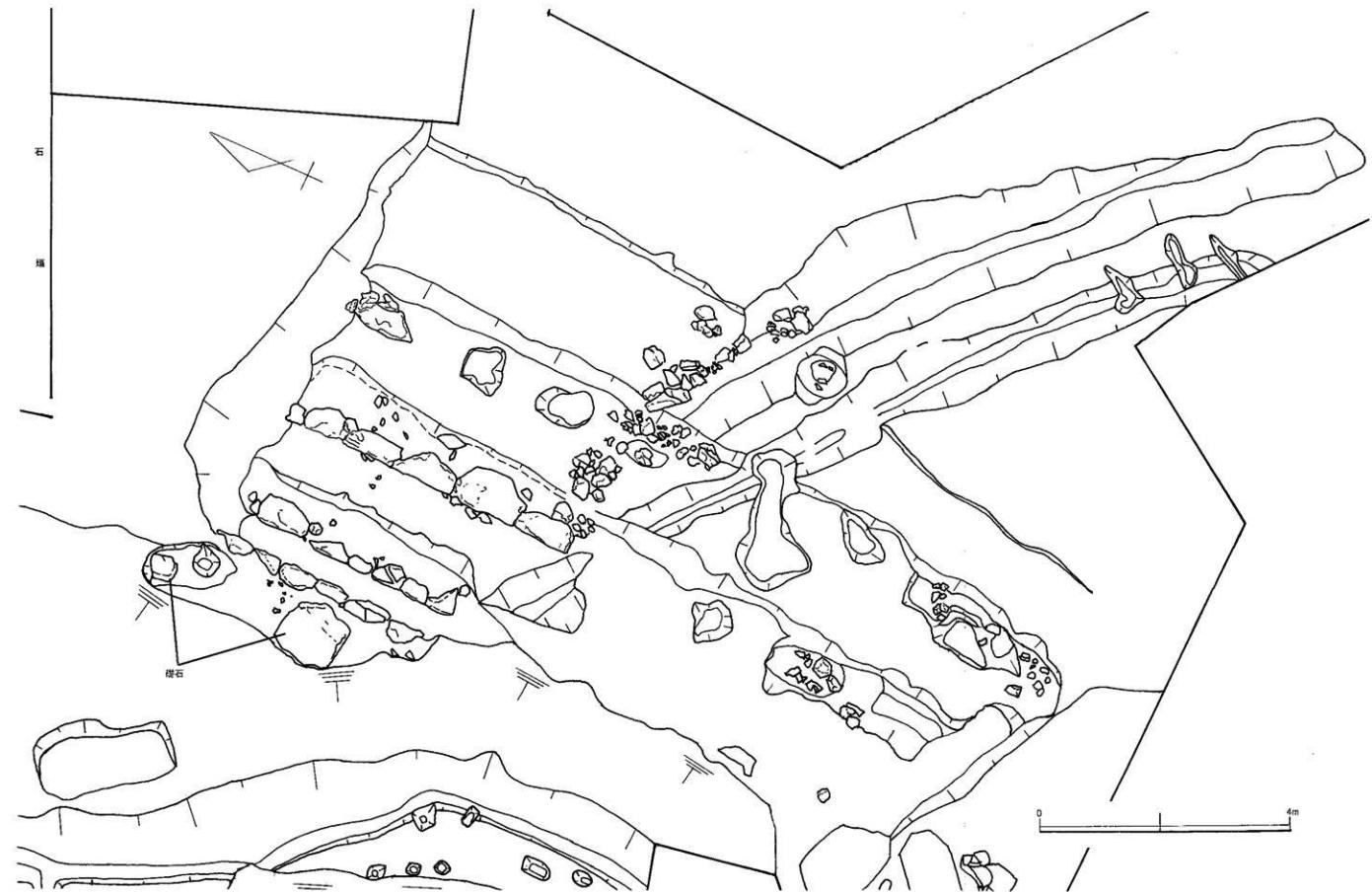
第4図 山中御殿平・花ノ壇地区遺構配置図 (S=1/200)



第5図 山中御殿平地区 S B 0 1 ( $S=1/100$ )



第6図 山中御殿平地区 SK 01 (S=1/60)



第7図 虎口遺構実測図 (S=1/60)

### (3) 虎口遺構（第7図）

SK 01 西側の斜面で検出した遺構である。調査前は浅く広んだ緩斜面になっており、周囲の石垣の状況からみても、ここに虎口跡が存在する可能性があると考え調査を行った。その結果、斜面肩部より階段遺構を検出し、ここが虎口であることを確認した。

中央部には御殿平が以前桑畠として利用されていた際の排水用と考えられる2条の溝状遺構が通っており、それを境に階段遺構南半部は著しく擾乱されていたが、階段と石組の痕跡はかろうじて確認することができた。

階段遺構は主軸をほぼ東西にとり、間口は13~14mで、一段の幅は約2mを測る。地山である真砂土層を段状に削り込み、各段の先端から約1m程度離して割石を並べ、段との間は真砂土を充填している。最下段の石列は後述する石組排水溝の東壁を兼ねており、また最上段の段は他に比べて段差が低く石列も見受けられない。

階段遺構の南壁沿いには幅約50cmの素掘りの排水溝が付属する。遺構の北西端には幅40cmの石組排水溝が設けられているが、南半部は消失している。

石組排水溝西側には幅約1mの扁平な石材が検出され、またそれより2.5m北にも幅約40cmの同じく扁平な石材を検出した。これらは門礎石の一部である可能性があるが、遺構西側と南側の崩壊が著しく断定するに至らなかった。

遺物は遺構埋没土中から唐津系とみられる陶器碗片1点と中国製青花小壺片1点が出土している。

この虎口に至るルートを探すために多間格石垣の西側先端部の調査も実施したが、斜面部は崩壊が著しく、北西角石部は検出したものの、そこから虎口へのルートは確認できなかった。

### (4) 帯曲輪遺構（第8・9図）

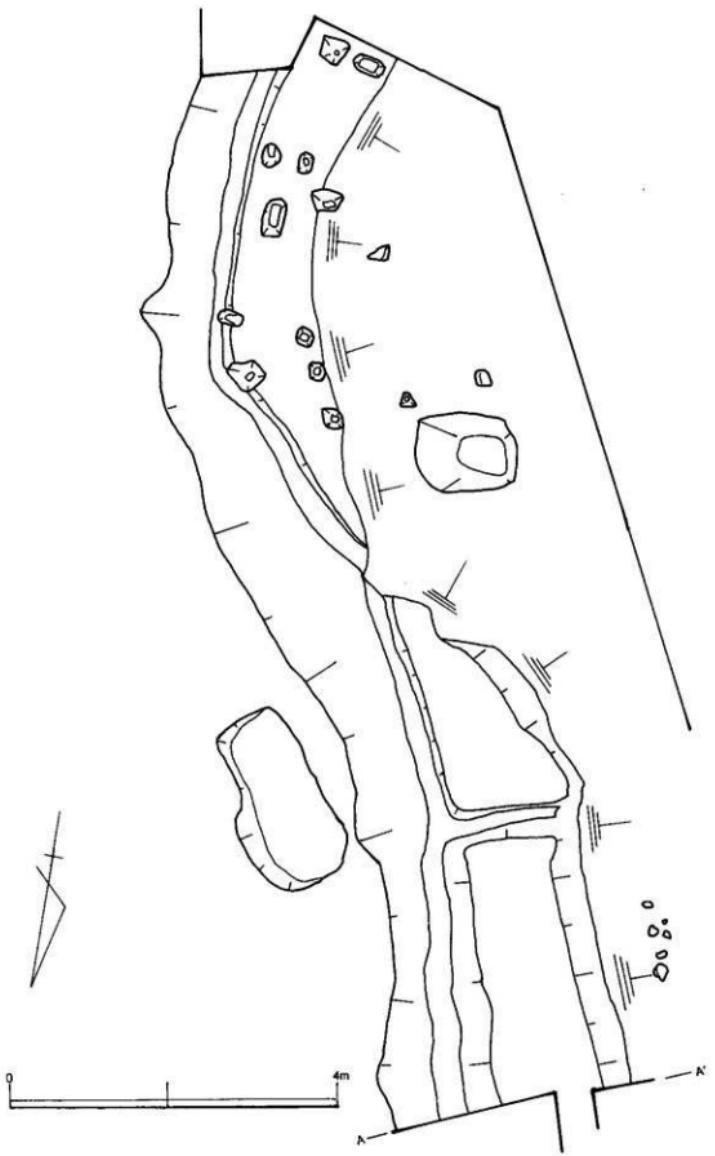
虎口遺構と花ノ壇とを繋ぐルートを確認するために多間格石垣の西側先端部を調査したところ、石垣構築の際の造成土に埋没する形で検出された。

斜面側特に中央付近の崩壊が激しいが、調査範囲内での長さ約13m、幅は約1.7mを測り、東側の壁面に沿って幅約40cmの排水溝がある。この排水溝は北から約3m程の位置で西側へ枝分かれしており、そこから下の斜面へ排水するようになっている。排水溝内からは京都系の土師質土器皿片が2点出土している。

曲輪は北半分は版築工法によって土が堅く叩きしめられているが、南半分には版築は見受けられず、岩盤上に小型のピットが複数検出された。

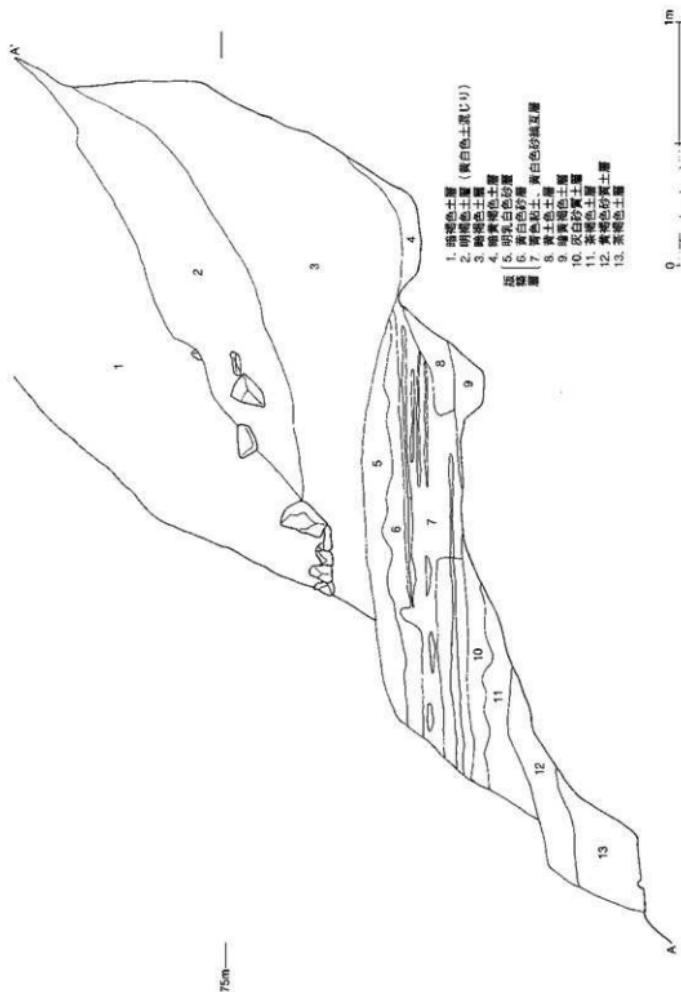
版築部分北端について立ち割りを行って下部構造を調査したところ、約40cm下層に排水溝を伴う別の遺構面が存在することが判明した。幅は約1.5mで、東側部分幅50cm程は岩盤を削って半坦面を造り、西側部分は幅約1m程土砂を盛って造られているが版築などはなされていない。

下層の遺構面からは遺物は出土していない。



第8図 帯曲輪遺構実測図 ( $S=1/60$ )

第9図 布曲輪遺構土層図 ( $S=1/20$ )



## 2. 出土遺物<sup>(3)</sup>

### (1) SK01 (第10図、表2)

本遺構から出土した遺物は破片総数326点に及ぶ。その内図化したのは以下の12点である。

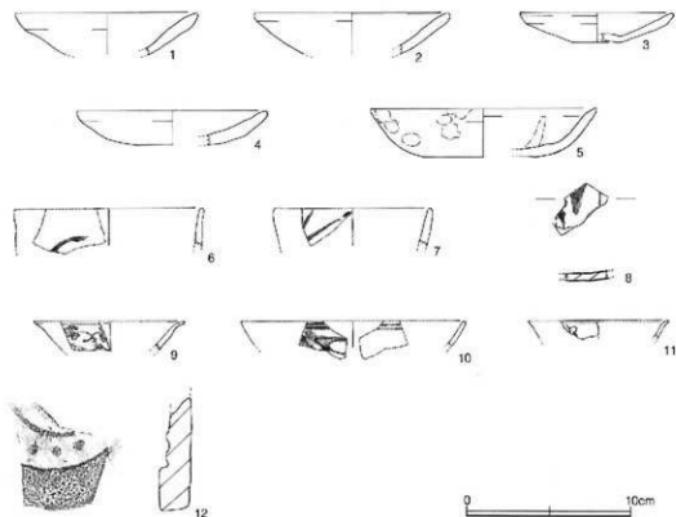
1～5は土師質土器の皿で、いずれも手づくね成形によるいわゆる京都系土師器皿である。ナデ調整が施されているが雑であり、特に5は指頭圧痕が顕著である。4は灯明皿として使用されたと見られ、口縁の一部に煤が付着している。

6・7は唐津系陶器でいずれも碗の口縁部である。外面には鉄絵草模様が施されている。

8は志野焼の皿もしくは向付の底部で、見込部に鉄絵で草模様と条線が施されている。

9～11は中国製青花である。9は皿で、小野分類B<sub>1</sub>群。10は碗で小野分類C群。11は皿で小野分類B<sub>1</sub>群である。いずれも15世紀後半～16世紀後半頃のもので、二次的焼成を受けており器表面が荒れている。

12は軒丸瓦の瓦当部分で外区に珠文、内区に三巴文を施す。



第10図 SK01出土遺物実測図 (S=1/3)

表2 SK01出土遺物観察表

図版	器種・器形	出土位置(層位)	口径(長さ)	底径(幅)	高さ(厚)	深さ	色調・胎土	器形・技法等の特徴	備考
1	土師質土器 盆	4層	11.2cm	—	—	—	淡茶褐色		京都系
2	土師質土器 盆	4層	12.0cm	—	—	—	淡灰褐色		京都系
3	土師質土器 盆	4層	9.4cm	3.0cm	1.8cm	1.2cm	淡茶褐色		京都系
4	土師質土器 盆	4層	11.6cm	6.0cm	2.1cm	—	淡茶褐色		京都系
5	土師質土器 盆	4層	13.8cm	7.0cm	3.0cm	2.5cm	淡茶褐色	内外面とも指頭圧痕多い 外面上鉄鉢により草文を施す。	京都系
6	唐津系陶器 瓢	4層	11.8cm	—	—	—	淡茶褐色		
7	唐津系陶器 瓢	4層	16.0cm	—	—	—	淡灰白色	外面上鉄鉢により草文を施す。	
8	志野 盆?	4層	—	—	—	—	淡灰白色	見込部に鉄鉢により草文を施す。	
9	青花 盆	4層	9.4cm	—	—	—	白色	外面に草文を施す。	小野B1群
10	青花 瓢	4層	14.0cm	—	—	—	白色	内外に二重界線	小野C群
11	青花 盆	4層	8.8cm	—	—	—	白色	外面に草文を施す	小野B1群
12	軒丸瓦	4層	—	—	—	—	外側墨褐色、 胎土茶色	外区に珠文、内区に三巴文	

## (2) 虎口遺構(第11図、表3)

虎口遺構から出土した遺物は2点のみである。

1は唐津系陶器筒型碗の口縁部で、口縁端部に濃緑の釉ダレがある。

2は中国製青花小杯で、16世紀中葉～後半頃と思われる。



第11図 虎口遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

表3 虎口遺構出土遺物観察表

図版	器種・器形	出土位置(層位)	口径(長さ)	底径(幅)	高さ(厚)	深さ	色調・胎土	器形・技法等の特徴	備考
1	唐津系陶器 瓢	石段遺構灰土層	11.8cm	—	—	—	淡緑色	口縁付近に釉ダレ。	
2	青花 小杯	石段遺構排水溝内	6.4cm	—	—	—	白色	外面に草文。	

## (3) 帯曲輪遺構(第12図、表4)

帯曲輪遺構では側溝内より土師質土器片2点が出土している。この内、図化した1は京都系土師質土器皿で、口径11.6cmを測る。灯明皿として使用されたとみられ、口唇部はほぼ全体に煤が付着している。



第12図 帯曲輪遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

表4 帯曲輪造構出土遺物観察表

図版	器種・形形	出土位置(層位)	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚)	深さ	色調・胎土	器形・技法等の特徴	備考
1	七輪式土器 盆 無繪内		11.6cm 3.5	5.2cm	2.2cm	1.7cm	淡茶褐色	口縁部に焼付着。	京都系

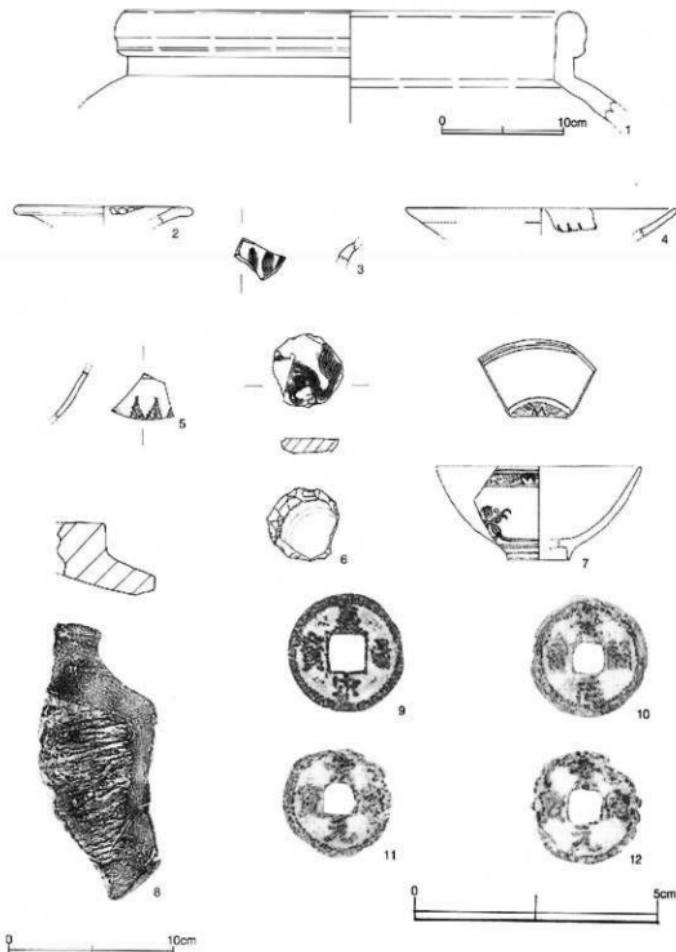
## (4) その他の遺物(第13図、表5)

1は備前系陶器甕で間壁縦年V期、16世紀のもの。2は瀬戸美濃系陶器の灰釉折縁皿、3は志野焼皿で内側に鉄絵で花弁を描く。

4は唐津系陶器皿で内側に鉄絵により草模様を施す。5～7は中国製青花で15世紀後半～16世紀後半のものである。5はいわゆる蓮子碗で小野分類C群、6は青花皿の底部を再利用した土製品で、高台の付け根の一部を残して周囲を打ち抜いて調整している。7は碗で小野分類CもしくはD群である。8は丸瓦で内面には桶巻き時に付いた布目が残る。9～12は銅錢で、9は皇宋通寶、10は景祐元寶、11・12は景德元寶である。

表5 山中御殿平地区出土遺物観察表

図版	器種・形形	出土位置(層位)	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚)	深さ	色調・胎土	器形・技法等の特徴	備考
1	備前系 甕	多間構下一括	37.2cm	—	—	—	暗赤褐色	口縁部外面に一条の沈線。	頭盤V期
2	瀬戸・美濃 灰 釉折縁皿	多間構下一括	11.0cm	—	—	—	淡緑色	内面に彫り込み花弁文を施す。	大窯IV期前半
3	志野 向付?	多間構下一括	—	—	—	—	淡灰白色	内面に鉄絵により花弁文を施す。	
4	唐津系 瓢	多間構下一括	16.8cm	—	—	—	淡茶褐色	内面に鉄絵により草文を施す。	
5	青花 碗	多間構下一括	—	—	—	—	白色	外面上に条線と蓮文様を施す。	小野C I群
6	土製品(青花)	多間構下一括	4.6cm	—	—	—	白色	見込内面に動物文、底部に2本の團線、皿の破片に一次的突撃を加える。	
7	青花 瓢	多間構下一括	12.8cm	3.8cm	5.8cm	4.5cm	白色	外面上に波瀾文ヒアラベスク。	小野C・D群
8	丸瓦	多間構下一括	6.0cm	—	—	—	淡黒灰色		
9	皇宋通寶	多間構下一括	2.4cm	—	—	—	—	真吉、北宋、1038年初鑄。	
10	景祐元寶	多間構下一括	2.5cm	—	—	—	—	真吉、北宋、1034年初鑄。	
11	景德元寶	多間構下一括	2.4cm	—	—	—	—	北宋、1001年初鑄。	
12	景德元寶	多間構下一括	2.4cm	—	—	—	—	北宋、1004年初鑄。	



第13図 山中御殿平地区出土遺物実測図 (S=1/3、1は1/4、銭貨は1/1)

## 第2節 花ノ壇地区

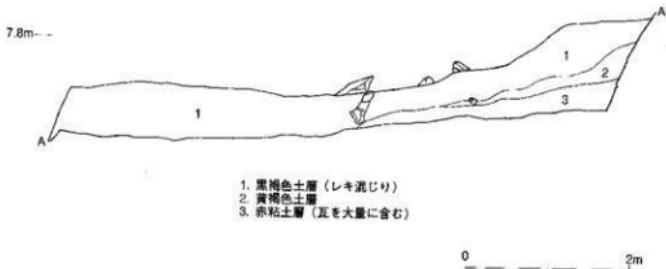
### 1. 検出遺構

当地区では、平成9年度までの事業において発掘・整備を行った花ノ壇から山中御殿平へ向かう通路跡が山中御殿平へどのように連続しているのかを確認することを主眼として調査を行った。

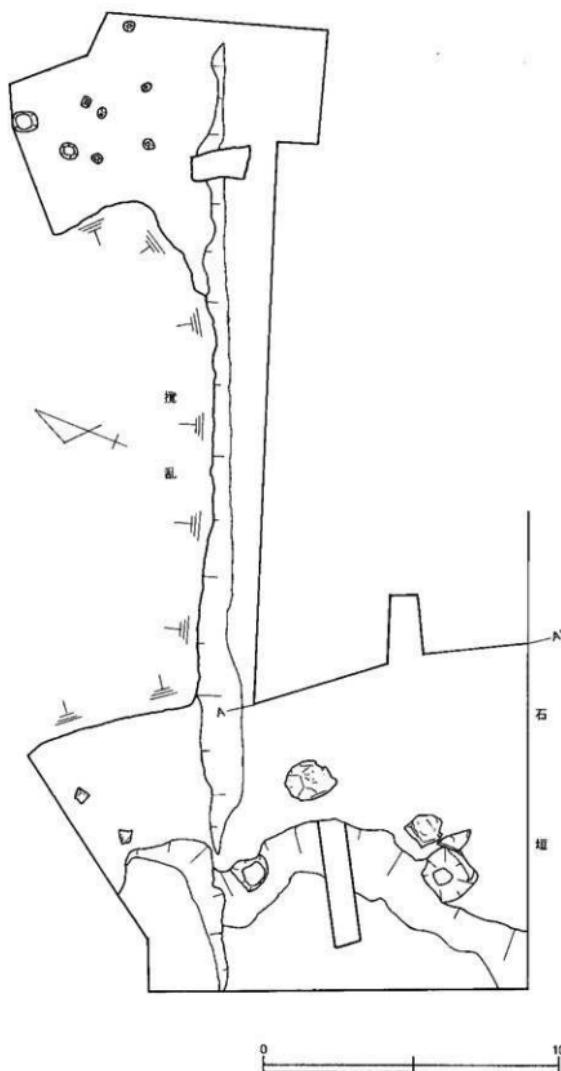
調査区は平成6・7年度調査地から道路を隔てて南側にあたり山中御殿平地区の通称「多聞櫓石垣」の北側に位置する。調査の結果、石垣の前面には厚さ1.2m程の土砂が堆積しており、遺構面上には石垣上部に存在した建築物を処分した際に廃棄されたものとみられる瓦片が堆積していた。また、石垣下場ラインに平行するように幅約1mの土質の異なる部分を検出した。これは石垣根石を埋設する際の堀り方プランであると考えられる。

石垣から約6m北側には、高いところで約50cm、東西長約16.5mの切岸を検出した。これは北側に隣接している曲輪の切岸かとも思われたが、調査区北東部では段差が無く緩斜面になっていることから、この切岸は石垣建造に伴って地形が加工された際にできたものではないかと思われる。

調査区内からは柱穴と思われる大小のピット群を検出したが、調査区西端の2つの大型方形ピットの他は配置が不規則で、建物、柵列等を復元することはできなかった。



第14図 花ノ壇地区石垣前面土層図 (S=1/60)



第15図 花ノ塙地区遺構実測図 ( $S=1/100$ )

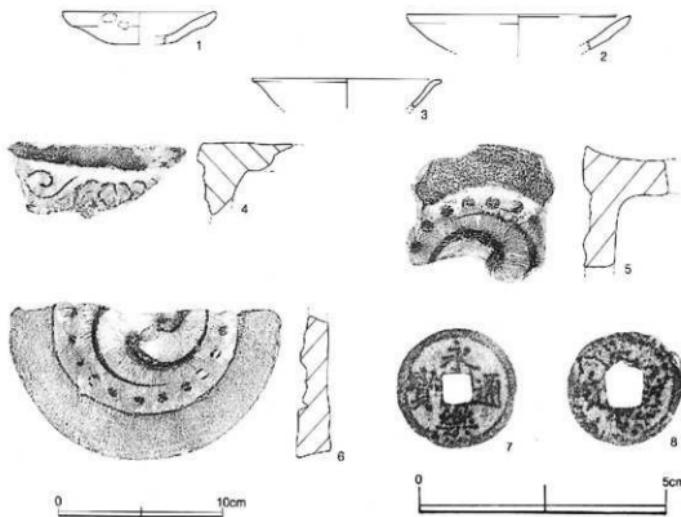
## 2. 出土遺物<sup>(4)</sup>

### (1) 花ノ塙地区出土遺物(第16図、表6)

花ノ塙地区からは、石垣下部の瓦溜まりから遺物が出土している。

1・2は京都系土師質土器皿で、1は口径9.4cm、2は口径13.6cmを測る。

3は中国製白磁の端反皿で、16世紀代のもの。4は軒平瓦で瓦当部中央に三葉、左右に唐草文を配する。5・6は軒丸瓦で外区に珠文、内区に三巴文を配する。7・8は銅錢で、7は永樂通寶、8是一文字判読不可能であるが、元祐通寶であると思われる。



第16図 花ノ塙地区出土遺物実測図(S=1/3、銭貨は1/1)

表6 花ノ塙地区出土遺物観察表

団	器種・器形	出土位置(層位)	口 径 (径さ)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	深 さ	色 調・胎土	器形・技法等の特徴	備 考
1	土師質土器 皿	黄褐色土	9.4cm	3.2cm	2.0cm	—	淡褐色	外面に指頭圧模残る。	
2	土師質土器 皿	黄褐色土	13.6cm	—	—	—	淡茶褐色	口縁端部に低い段を持つ。	
3	白磁 皿	黄褐色土	11.6cm	—	—	—	乳白色	端反皿	
4	軒平瓦	黄褐色土	—	—	—	—	淡茶褐色	瓦当部に三葉と唐草文	
5	軒丸瓦	黄褐色土	—	—	—	—	淡黒灰色	外区に珠文、内区に三巴文	
6	軒丸瓦	黄褐色土	—	—	—	—	淡黒灰色	外区に珠文、内区に三巴文	
7	永樂通寶	黄褐色土	2.4cm	—	—	—		明、1408年初鋤	
8	元〇通寶	黄褐色土	2.3cm	—	—	—			元祐通寶?

## 第IV章 まとめ

### 山中御殿平地区の虎口について

山中御殿平地区は富田城内でも最大規模の面積を持つ曲輪の1つである。その周囲は大規模な石垣により区画されており、通称「上御殿平」とそれに隣接する通称「下御殿平」の2つの平坦地で構成され、その繩張りも近世城郭的な要素を強く感じさせる。

上御殿平と下御殿平の間は低いし字型の石垣で区切られており、上御殿平のほうがわずかに高くなっている。また昭和55・56年度の調査では、この石垣に沿って建物跡が見つかっており、これらの事から、御殿を中心とした中枢部にあたるのが「上御殿平」。そしてその玄関口であり、御殿方向と月山山頂方向への道の分岐にあたる場所が「下御殿平」であると推定される。

今回の調査で最も注目すべき成果は、下御殿平北西部に虎口跡1箇所を新たに確認したことである。この虎口跡は階段遺構を伴い、その幅は約13mを測り、山中御殿平地区の虎口の中で最大の開口を持つ。西側斜面部は崩壊が著しいが城門の礎石とも考えられる石材も検出されている。階段の軸を隣接する多聞櫓石垣に平行せず、ほぼ真西方向に取っているのは、恐らく花ノ塙方向からこの虎口へ至るルートを想定してのことであろう。

ちなみに現在まで知られている山中御殿平地区的虎口跡は上御殿平に「大手門跡」、「旧大手門跡」、「塙谷口」の3箇所、下御殿平に「苔谷口」1箇所の計4箇所である。

「大手門跡」は上御殿平北西隅から曲輪中央付近にかけて大きく窪んだ谷地形のこと、いつ頃からそう呼ばれるようになったかは不明である。谷部分の数カ所について発掘調査が行われているが、ここに門跡等、虎口があった明確な痕跡は見つかっていない。

「旧大手門跡」は上御殿平北側石垣中央部に虎口左右の隅角部ラインが見られることから、ある時期に埋め込まれて一面の石垣に改修されていることが分かった。開口は約7.5mで、隅角部にははっきりと算木積みが見られる。昭和58年に内側が発掘調査され、L字状に屈曲する石垣が厚さ3mの土砂により埋め込まれていることが確認されている。

「塙谷口」は上御殿平西南に位置し、昭和54年度に調査された。<sup>(3)</sup> 狹い虎口に入った突き当たりの左右に石段があり、右は月山、左は「大手門跡」方面へ向かっている。この虎口も瓦を含む大量の真砂土で埋められていた。これが破城の際に行われたものか、それとも山中御殿平改修の際不要と見なされたことによるものかは断定できていない。

「苔谷口」は下御殿平で唯一存在が知られていた虎口で東側に位置する。隅櫓台石垣に付属する土塁跡石垣に挟まれて門があったと考えられ、昭和54年に調査されたが、後世の開墾によるためか、門礎石などは確認されなかった。<sup>(4)</sup>

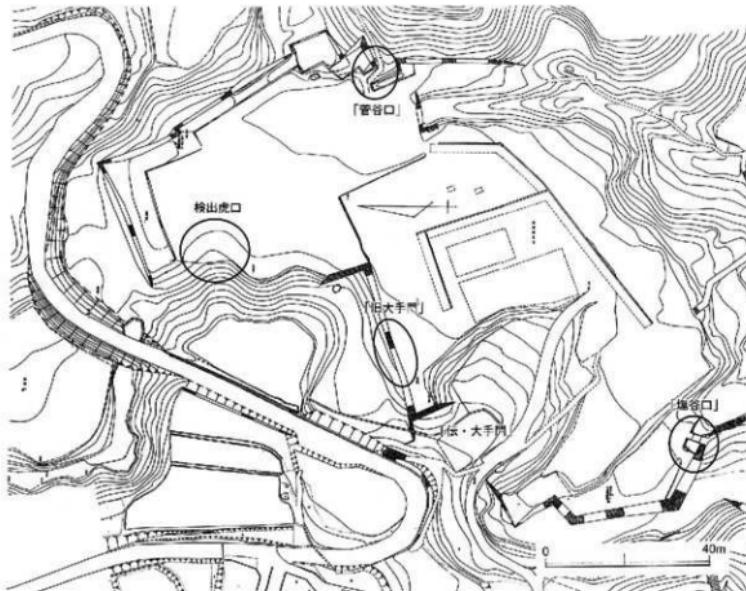
これら虎口遺構はすべてが同時に機能していたとは考えにくい。山中御殿平地区を近世的城郭の本丸的空間であるととらえた場合、その虎口は「大手」と「搦手」の2ヶ所のみであるのが一般的である。さらに「旧大手門跡」が改修により埋没している事実から見て、それぞれの虎口は時期を異にして、いくつかのセット関係があると考えられる。これについては各虎口の発掘により出土した遺物に唐津系陶器が含まれること、また出土した丸瓦の製作技法はほとんどすべてがコピキB技法によるものであることなどから、少なくとも

16世紀末以降に山中御殿平地区が建設または改修されたと考えられる。

しかし虎口個々の構築時期については遺物から判断することは困難であった。

そこで注目したのが虎口の埋没状況である。虎口の存在すらはっきりしない「大手門跡」はあえて除外するとして、「旧大手門跡」と「塙谷口」は土砂によって人為的に埋められている。

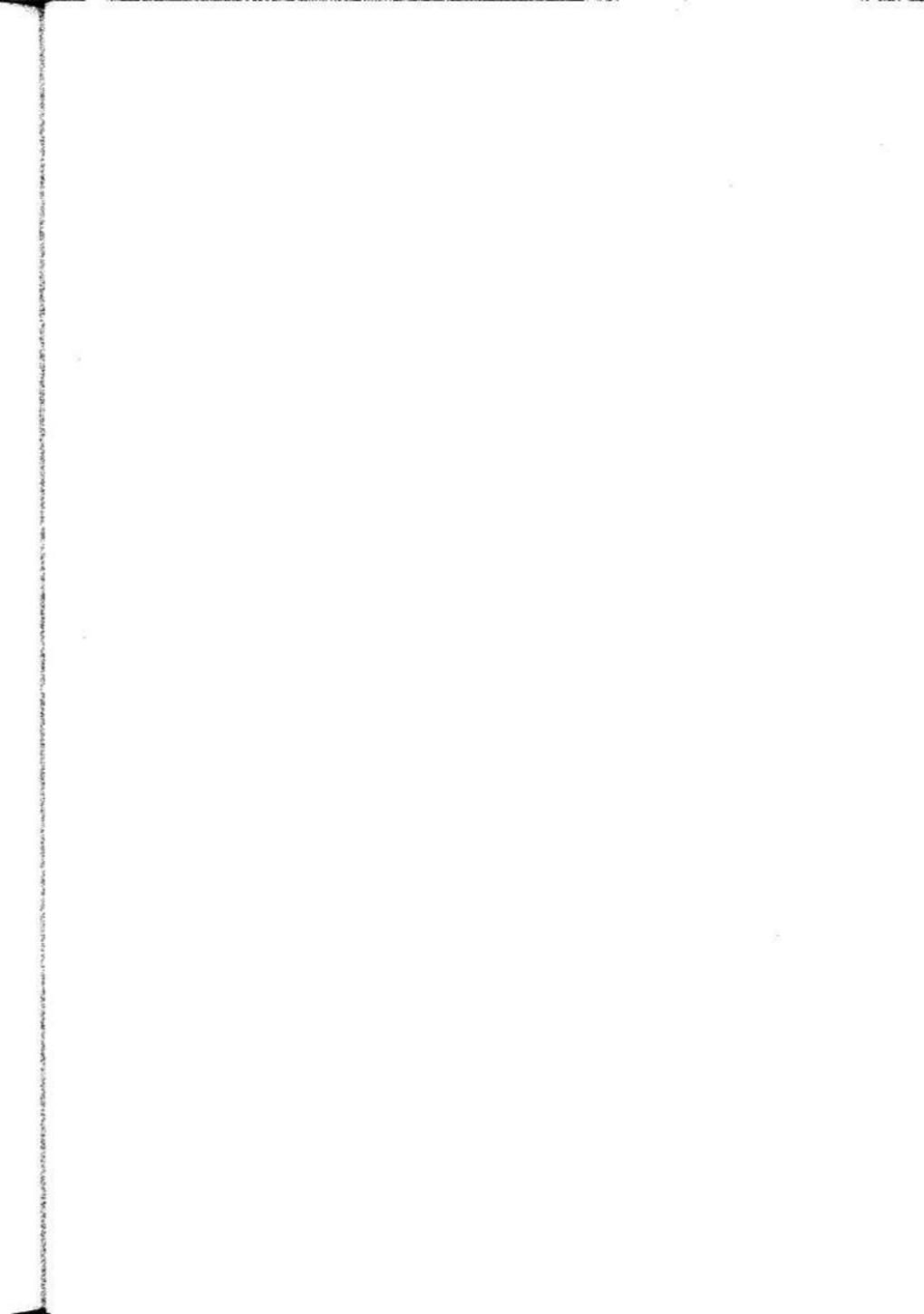
対して「菅谷口」と今回の調査で検出した階段を伴う虎口は自然堆積土により埋没している。これらの事象のみで断定することは危険であるが、あえて推理すれば、富田城の終末期の堀尾氏在城期には今回検出した虎口が「大手」、菅谷口が「搦手」として機能していたのではないかと考えられる。いずれにせよ今後もこの問題を含め、山中御殿平地区についてはその構造・性格について不明な部分も多く、今後の重要な課題である。



第17図 山中御殿平地区の虎口跡 (S=1/1200)

(注)

- (1) 広瀬町教育委員会1980『史跡富田城跡山中御殿半昭和50~54年度環境整備報告』
- (2) 季刊誌などで概要は報告されているが報告書は未完である。
- (3) (4) 陶磁器の年代は以下の論文を参考にした。
- (中国製青花)  
小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会
- (中国製白磁)  
森田一勉1982「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会
- (備前系陶器)  
岡壁忠彦1991『備前焼』(考古学ライブラリー-60) ニューサイエンス社



# 図版



山中御殿平地区SB01・SK01（南から）



山中御殿平地区SB01（北から）

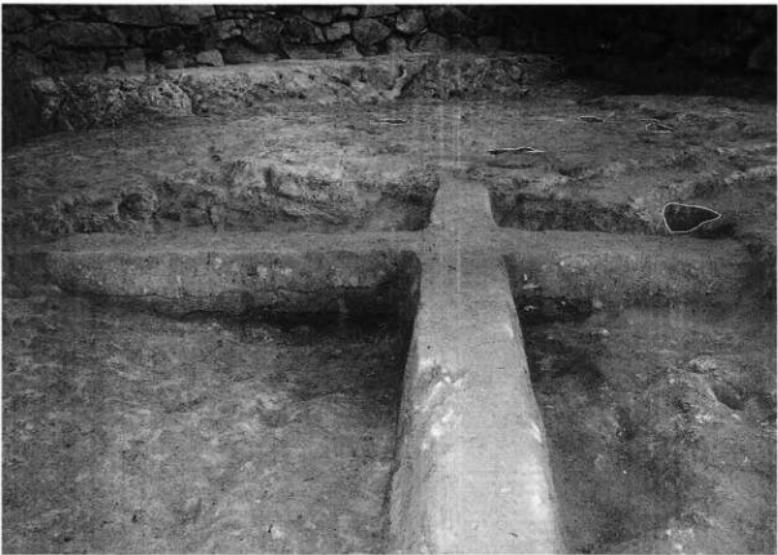
図版2



SK01と石垣の間の段差（西から）



SK01土層断面（B-B'、西から）

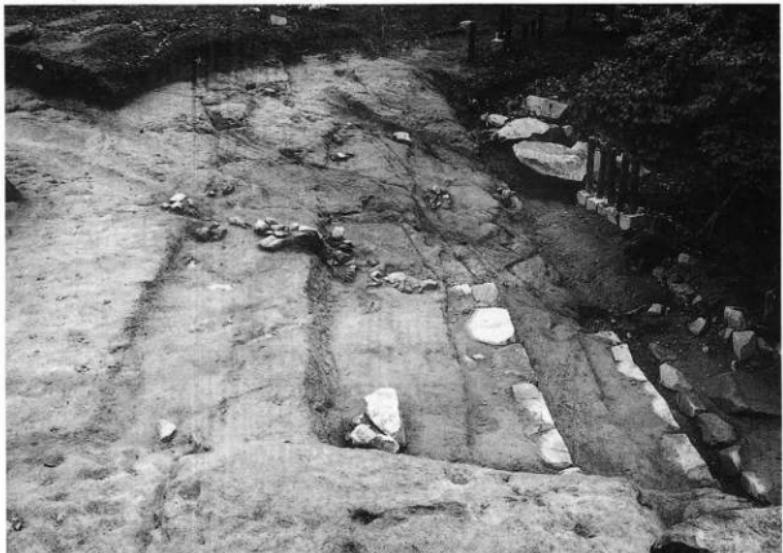


SK01 土層断面 (A-A'、南から)



SK01 完掘状況 (北から)

図版4



虎口造構階段跡（北から）



虎口造構階段跡（南から）



階段跡石組排水溝（西から）



帶曲輪造構（南から）

図版6



帯曲輪造構版築部分（南から）



版築部分土層断面（A-A'、南から）



版築部分下層造構面排水溝（南から）



多間横石垣北西隅角部（北から）

図版8



多聞櫓石垣北西隅角部（北西から）



多聞櫓石垣裏込石露出状況（南から）



花ノ塙地区石垣前面堆積土層断面（A-A'、北西から）



花ノ塙地区東側部分（南東から）

図版10



花ノ塙地区西側部分（南東から）



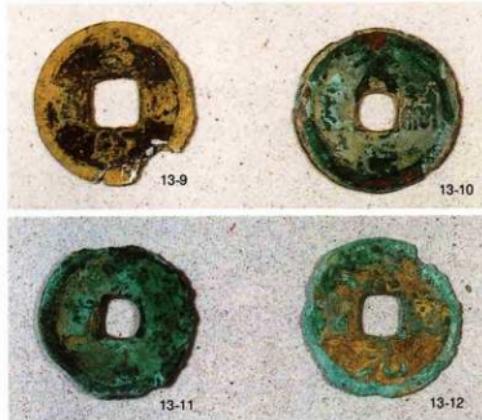
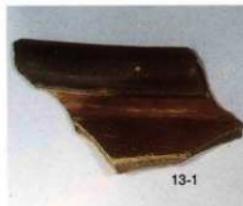
花ノ塙地区切岸（西から）

図版11



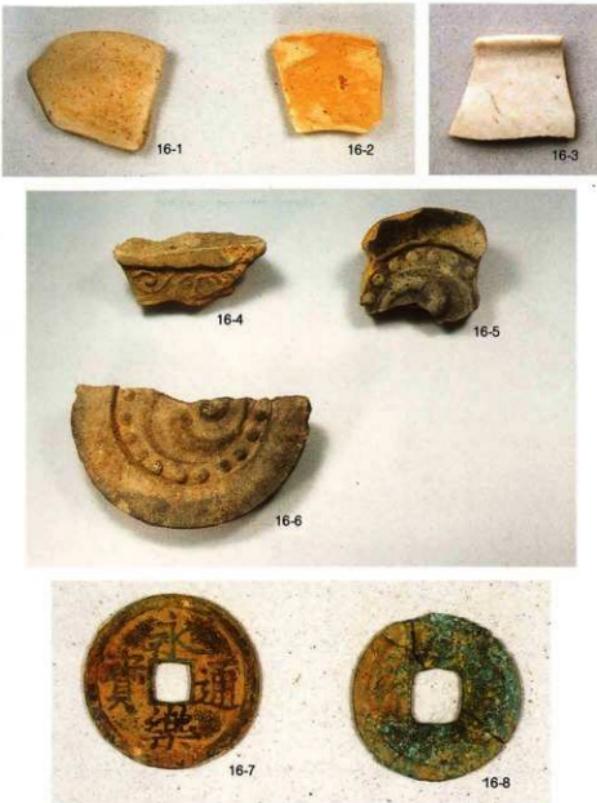
SK 01 (10-1~10-12)、虎口造構 (11-1、11-2)、帶曲輪造構 (12-1) 出土遺物

図版12



山中御殿平地区出土遺物

図版13



花ノ塙地区出土遺物

---

史跡富田城跡環境整備事業  
(ふるさと歴史の広場事業)に伴う  
**史跡富田城跡発掘調査報告書**  
(山中御殿平・花ノ塙地区)  
2002年3月

編集・発行 広瀬町教育委員会  
島根県能義郡広瀬町広瀬752  
印刷 松栄印刷有限会社

---